

NJ 素流協 News

平成24年6月30日
第90号

平成24年6月30日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

第1回 国産材利用拡大 推進会議を開催

今年度の第1回国産材利用拡大推進会議が、6月26日、盛岡市の農林会館会議室において開催された。

開会にあたり、NJ素流協下山

理事長は、「この会議は、平成13年に開催され素流協設立の発端となつた『県産カラマツ材等利用拡大連絡会議』が名称、構成メンバーを変えながら継続されてきたものであり、20年度からは『国産材利用拡大推進需給協議会』として開催されてきたが、昨年度は大震災の影響により開催を休止していた。

今年度から『国産材利用拡大推進会議』と名称を改め、森林・林業・木材産業をめぐる社会的・経済的・質的变化に即応しつつ、国産材の計画的・安定的供給と利用拡大を促進するため、国産材の需要者・供給者・関係機関との情報交換及び連携を強化することを目的とし

て再開された。有識者、関係業界から必要に応じて情報提供していただくオープンな会議とし、実効性のあるものにしていただきたい」と挨拶した。

主な報告・協議事項は次の通り。

一、NJ素流協24年度事業計画

今年度の共同販売事業の計画量は、合板用素材15万m³、集成材用等素材9万m³、計24万m³であり、流通経費支援の補助事業を活用する。

低質材(C・D材)については、発電用等の木質系バイオマスの利用拡大を見据え、低コスト安定供給体制の構築に努める。

二、原木等の需給動向

ア、素流協の出荷実績と見通し
昨年度の出荷実績は、大震災の影響により合板用素材は約9万m³、集成材用等素材は約7万m³、計16万m³で前年度から約10万m³減少し

た。

今年度4・5月の出荷実績は約3万3千m³であり、合板工場の在庫量増加による生産調整の強化、また円高・ユーロ安の影響による国産集成材の苦戦等から、厳しい状況が続いており、当面増える見込みはない。

イ、合板工場等の需要動向

【セイホク(株)報告】

セイホクグループでは、今月初めに国産針葉樹合板について一律20%の生産調整を行うことを発表し、全国的に他社も同様の調整を行っている。生産調整の期間は設けられておらず、状況に応じて見直されるが、しばらくの間減産が続くと見込まれる。

これを受けてセイホク(株)では、トータルでは20%減産となるが、長尺合板(8~10尺の合板で外材が主体)を減らし、3×6尺を増やすことにより国産材の減少率を抑えるようにしている。

素材の月間消費量は震災前の7割程度である3万6千m³まで回復

していたが、減産で約2万9千 m^3 になる見込みである。

【ホクコープライウッド(株)報告】

国内の合板の4月末の期末在庫量は約29万 m^3 あり、これを20万 m^3 まで減らすことを目指し生産調整が行われている。製品価格については値崩れが起きている状況であり、素材の価格に影響もあるが、国産材を減らさないようにしていきたい。

【(有)川井林業報告】

栗石工場でのN J素流協からの素材入荷量は、4月以降ほぼ横ばいに推移しており、7月は5千3百 m^3 でスギのみの予定である。以前はスギとカラマツの比率が7:3だったが、5月中旬よりスギのみとなっている。

栗石工場での月間素材消費量は1万3千 m^3 から1万5千 m^3 と増えており、現在は1日あたり600 m^3 消費している。

【トリア木材(株)報告】

カラマツの製材品(中断面集成材ラミナ、梱包材、パレット材等)

の市況は悪く、首都圏の建築需要の影響と考えられる。針葉樹チップについては、納入先の被災工場は8割方復旧しているが納入量は震災前の5〜6割であり、カラマツ、アカマツは需要があるがスギは厳しい状況である。広葉樹チップについては不足している。

ウ、素材生産業者の生産動向

◎岩手県森連の県内10箇所の木材センターでの販売量は、5月末でほぼ前年並みの6万 m^3 であり、22年と比較すると13%の増となっている。これは広葉樹の増加によるものと考えられる。夏場は需要も単価も落ちる時期であり、素材生産も減少する見込み。森林組合は委託間伐中心で行っており、B・C材の販路が少ないため、買取林産は抑え気味である。一方機械化が進んでいる組合では、採算面から年間通して生産する必要があるため、立木で1万5千〜2万 m^3 買取り、夏から秋にかけて販売するところもある。全国的な市況としては、ヒノキの価格が下落してお

り、首都圏の住宅着工の伸び悩みが影響していると考えられる。

◎岩手県国生連では、昨年からの厳しい供給事情で立木の生産を抑えてきたが、国有林の23年度3次補正予算による前倒し発注があり、現在ほとんどの国生協は山を確保している。年内はこの状況が続くと見込まれる。

◎青森県整備協組合員は1月以降手持ちの山で生産してきたが、5月下旬から国有林の仕事に入っている。1月から9千 m^3 生産し、半数が合板、残りがチップ、集材用素材等である。

◎青森県国生協では、山に木はあるが、生産できない状況である。生産しても丸太がスムーズに流れず、山土場に積んである。国有林の請負事業を行っていない業者にとっては厳しい状況である。スギが売れないため、広葉樹の生産に取り組んでいる業者もある。

◎他に素材生産者側からは、チップ材が売れないため、合板用素材を伐採するほど針葉樹チップ材が

山に残ってしまい苦慮している、との報告があった。

三、東北森林管理局からの情報

24年度の管内販売計画量は67万8千 m^3 、うち13万4千 m^3 が岩手県分である。うちシステム販売については、年間38万5千 m^3 の計画のうち1回目24万3百 m^3 の公告を行い、約20万5千 m^3 に手が上がった。

8月に2回目の公告を行う。また原発事故の影響で全国的にしいたけ原木が不足しているため、国有林からも供給したい。オガ粉用の需要が多く、皮付きであれば太さは問わず売れる。

四、岩手県からの情報

復興住宅の建設にあたって、各地域において原木供給者、工務店などが連携した地域住宅生産者グループが結成された。県産材の供給が円滑に行われるよう支援をしていく。また、しいたけ原木の不足に当たって、低利の融資制度について補正予算措置し、原木の確保を進めることとしているので、生産についてよろしく願います。

ヤマビル被害の原因と防除対策

昨今、林業関係者や登山客の間で、ヤマビルによる吸血被害が増えてきているとの情報がある。東北地方でも、「昔はこんなになかった」との声が寄せられている。ヤマビル被害の状況とその原因、対策を調べたのでご紹介します(「ヤマビル研究会」谷重和氏らがホームページ等に公開している記事他を参考に構成しました)。

ヒルは主に、池・沼等に生息するチスイビル、林内に生息するヤマビル、住宅地などに生息するコウガイビルの三種類に大別される。山で吸血被害に遭うのがヤマビルである。ヤマビルはミミズと同類の環形動物で、雌雄同体で1匹でも産卵することができる。寿命は3年程度である。通常は草むら等に潜んで、ニホンジカ、カモシカ、イノシシ等の野生動物に取り付いて吸血するが、人が生息域に入ると、呼吸に含まれる二酸化炭素や体温などを感じ取り、寄ってくる。なお、チスイビルは魚など水生生

物から吸血し、コウガイビルは吸血しない。

ヤマビルの身体の前後には吸盤があり、尺取虫のように体を動かして移動する。前吸盤の逆Y字型の口に多数の歯が並んでいて、動物の皮膚に傷をつけ、ヒルジンと呼ばれる血液の凝固を妨げる物質を出して吸血する。ヒルジンには麻酔作用があり、吸血されていては感じないことが多く、靴下などが血で染まって初めて被害に気付くことが多い。人体の大きさに対する吸血量はごくわずかで、深刻な健康被害はないが、中には1ヶ月以上かゆみが続いたり、患部が赤く腫れる人もいる。

防除方法としては、山に入る前に予め皮膚や衣類・靴に忌避剤を塗布するのが一般的である。主成分は昆虫用虫除けにも使用されるディートである(商品名Ⅱヤマビルファイター、ヒルノック、ヒルよらん等)。

殺ヒル剤や消石灰、木酢液等を

地面に散布し、ヤマビルそのものを駆除する方法もある。この場合、ヒルの体に直接薬剤が付着しないと効果が上がらないので、散布の前に人が歩き回り、道路や草むらの表面にヒルをおびき出すなどの準備が必要である(殺ヒル剤商品名Ⅱヤマビルジェット、ヤマビルキラール等)。また、ヤマビルは乾燥に弱いので、生息域周辺の草刈り、落ち葉の除去、間伐等を行って、風通しと日当たりを良くし、ヤマビルが生育しにくい環境を作るとも有効である。

昨今ヤマビルが増えたと言われる原因の一つとして、ヒルは湿った環境を好むので、手入れが行われていない森林等の増加が、ヒルの増殖に好適な環境を広げていることが考えられるのである。

昭和50年代以降秋田県内でヤマビルが大発生し問題になった。後年県は本格的な対策に乗り出し、野生動物の種類別生息密度と、ヤマビルの体内に残る血液中のDNAを調査した。すると、その地域ではカモシカの生息密度が最も高く、かつ捕獲したヤマビルのうち

6割近くがカモシカを吸血していることが判明した。また千葉県房総半島で同様の調査をしたところ、ニホンジカが多く吸血されていることが分かったほか、蹄の間に繰り返し吸血された跡を持つシカが多数見つかった。

東北地方の造林地や農地では、カモシカ、ニホンジカによる被害が深刻であり、近年では宮城県で野生イノシシの生息域が北へひろがっているとの報告もある。ヤマビルを体に付けた動物が林地や人里に侵入し、人の近くにヒルを「ばら撒いて」いることは十分に考えられるのである。シカ柵等の設置は、食害防止とともに、ヤマビルの防除効果も期待できる。

参考 (株)環境文化創造研究所ヤマビル研究会ホームページ

<http://www.tele.co.jp/ni/leech/index.htm>

「ヤマビルの生態とその防除方法」

谷重和、石川恵理子(「森林防疫」

Vol.54 No.5 平成17年5月)

「ヤマビル対策マニュアル」

神奈川県東地域政総合センター

環境部編(平成21年3月)

「日本型フォレスター研修」

今年2年目を迎えた林野庁の同研修が、盛岡市内で6月18日から5日間の日程で行われ、N J素流協の高橋常務理事が「木材の流通・販売」について講義を行いました。

「森林総合研究所セミナー 多雪地帯での低コスト

再造林技術を目指して」

盛岡市内で6月27日に開催された同セミナーにおいて、N J素流協の外館経営企画部長が、「低コスト再造林の取り組み」について発表しました。

「カラマツコンテナ苗研修会」

北上川中流流域林業活性化センターの主催により、フォレスト再生モデル実証事業の実証地において、同研修会が6月6日から3回開催され、N J素流協から組合員、事務局職員が参加しました。

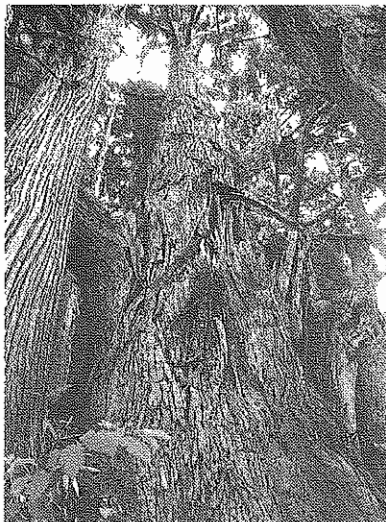
今月の名木・巨木 3 (花巻市)

花巻市指定天然記念物

白山杉

指定…1989年6月16日

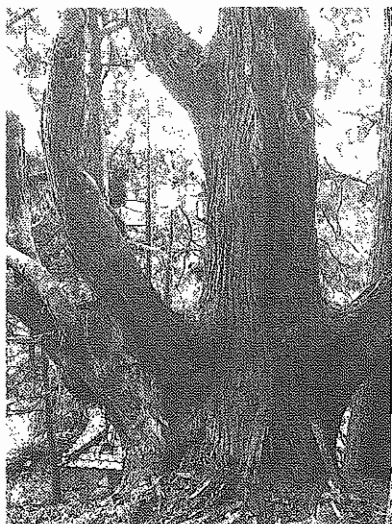
所在…花巻市大迫町内川目久出内



てきた力強さが感じられる。最近では特別な力が得られるというパワースポットとしても紹介されている。

花巻市大迫町の早池峰ダムに近い久出内地区は、市指定天然記念物の樹木が3本あり「巨木の里」として知られている。

そのなかの1つ「白山杉」は、岩手県内でも最大級の杉の巨樹であり、幹周り11m50cm以上、樹高約50m、推定樹齢900年以上とされている(案内板より)。その姿は威厳に満ち、永い年月に亘り地域を守つ



「白山杉」にはこのような伝説がある。その昔、この地区に住んでいた殿様が、娘に先立たれ娘の使っていた鏡を大きな杉の根元に埋めて、小さな神社を建てた。娘は顔にカサツコのある娘だったため、杉の木にはカサツコの神様が住んでいて、カサツコができたときは小さなエチコ(ゆりかご)を作って納め、杉の下から湧き出る湧水をもらっていった。これをカ

サに塗るとたちまち治るといふことで、遠くからも水もらいに来た(大迫教育委員会編「おおはさまの伝説」より)。

同地区にはほかに「山祇桂やまぎき」、「才

冗談欄

ぼちやカワ景気

流通ジャーナリスト金子某なる人物の予測によると、やがて「ぼちやカワ景気」が到来するという。

ぼちやりしていてカワイイ芸人いわゆるLサイズ芸人の人気が出てくると予測し、それに関連した商品の需要が増え、景気が回復するということのようにだ。

確かに、テレビを見ていると、短めのシャツを着てへそや下腹を出している小太りの女性芸人が頻繁に出ており、そのような芸人をぼちやカワ系芸人というそうだ。

以前は、スマート美人、太っているHブスの構図であったものが、この頃は行き過ぎたダイエットによる痩せ過ぎは不健康で、ぼちやりと小太りしている方が健康的であるという。気持ちいが柔らかくて優しく、包容力を感じ、安定感があるということが受け入れられてきているようだ。

ノ神のサワラ」と呼ばれる巨樹があり、いずれも見ごたえがある。地区では要所要所に標識が整備され、住民によって大切に保存されていることが窺われる。

若い女性にとって、無理して痩せなくてもよく、身体にあったものを着、好きなものを食べ歩くことが許されるのである。

その結果として、大型サイズの衣類が売れるようになり、間食用のお菓子や高カロリーの外食がよく売れ、その波及効果として、小物類や宝石類も売れ出すというのである。

いわゆるぼちやカワ市場が拡大、活性化するというのである。この現象を大いに喜んでいる我が姪、食欲にますます磨きがかかってきている。

「愛らしい『ぼちやり』見苦しい『でっぷり』の境界を見失なわないように」という但書きは目に入らぬようだ。

それにつけても、ぼちやカワ景気で木材消費量が増えることはないようだ。

平成24年6月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約250㎡増加、カラマツが約1,150㎡増加、アカマツが約680㎡減少し、全体では約730㎡増加している。昨年同月と比較すると、スギが約1,160㎡減少、カラマツが約3,430㎡増加、アカマツは約1,970㎡増加し、全体では約4,230㎡増加している。今月のシステム販売取扱量は約570㎡であった。
- 2 その他(合板用以外)の出荷量は前月より約270㎡減少、昨年同月より約260㎡減少している。
- 3 今年度の年間計画量(案)に対する出荷量の割合(目標達成率)を25%とすると、今年度の全体出荷実績は、計画数量を4ポイント下回る結果となった。

【訂正】前号掲載の5月の販売実績表で数値に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

広葉樹 誤：80㎡ → 正：124㎡ これに従い当月実績表で累計を修正しております。(㎡)

樹種	長級(m)	当月出荷量			今年度累計			
		合板用	その他製材用等	計	合板用	樹種別割合(%)	その他製材用等	計
スギ	2.0	2,405			6,423			
	4.0	797			3,862			
	計	(567) 3,202		(567) 8,114	(634) 10,285	31.2		(634) 24,611
カラマツ	2.0	4,042			10,544			
	4.0	2,486			5,271			
	計	6,528	589	(0) 7,116	(55) 15,816	48.0	2,701	(55) 18,517
アカマツ	2.0	1,849			5,086			
	4.0	118			1,773			
	計	1,967		(0) 1,967	(0) 6,859	20.8	98	(0) 6,957
その他針葉樹			33	33	0	0.0	48	48
広葉樹			56	56	0	0.0	240	240
合計		(567) 11,696	5,590	(567) 17,286	(689) 32,960	100.0	17,414	(689) 50,373
目標達成率(%)								21.0
今年度計画量								240,000

() はシステム販売取扱量(内数)

落穂拾い

時は、六月の初旬。北国・盛岡ではもつとも良い季節。昼食後の腹ごなしに中津川河畔を散策する。「下の橋」のたもとまで来ると一種独特な匂いがほのかに漂ってくる。桐の花の香りである。あたりを見渡すと、橋を渡って下ノ橋町に入る道路沿いの事務所風の建物の庭に一本の桐の木が立っていて、花は今が盛りと咲き誇っていた。近くまで寄ると、淡紫色(藤色)のラッパ状の花が十数個固まって花序から垂れ下がり、桐花の香りが一層強く鼻につく。野趣めいたというか、鋭いというか、度きついというか、独特な香りを放っているが、人によっては好き嫌いが激しい花香といえよう。この桐の花は、岩手県の「県の花」に指定されているが、それは岩手県ではごく普通に見られる代表的な花だからかもしれない。かの有名な『遠野物語』の中に「遠くを望めば桐の花の咲き満ちたる山あり。あたかも紫の雲のたなびけるがごとし」とある。また、清少納言が『枕草子』で「紫に咲きたるは、なほをかきたきに」と書くなど日本人に愛でられてきた花なのだろう。岩手県の桐材は「南部桐」として昔から知られている。日本産の材のうちではもつとも軽く、木目が美しく狂いも少ない、それでいて丈夫で燃え難いことから、下駄、箆筒、茶道具、楽器や金庫の内張りなどに使われてきた。成長も早く20年ほど

で成木となることから、昔は女の子が生まれると、庭に桐の苗木を植えた。ちようと嫁入りする頃には成長した桐の木で箆筒を作り、持たせる習慣があったと聞いた。

いまは昔、落穂拾い子が中学校に上がる時、当時の中学生が好んで履いていた足駄が無性に欲しくて欲しくて仕方がなかった。それは下駄の台が厚い桐材で、歯は朴の木でできていた。母親に「桐の足駄が欲しい」と懇願したのだが、母親の口から発せられる言葉は「ダメー」の一点張りである。その理由は、「足をくじく」ということであつた。たしかに当時の私は背丈が小さく体格も貧弱であつたから、足駄は歯が高く、結構重かつたので心もとなく感じた母親の言うことも一理あつたかもしれない。しかし、私はあきらめなかつた。ある夕食時に、意を決して父親に直訴したのである。晩酌でほろ酔い加減の機嫌の良い父親は、「うん、うん」と頷きながら聞いていたが、「母さん、こいつも中学生になつて少し変わりたいのだから。自分の身体は自分で責任を持つ」ということで、買ってやったら」という断を下した。やつたぞ、やつた！ついに、白緒の、朴歯の、桐の足駄を手に入れたのである。無上の喜び、天にも昇る気持であつた。しかしなぜ、今になつて遠い昔のことを思い出したのだから。きっと桐花の強烈な香りに酔つた挙げ句の夢想に遊んだのだから。忙中閑あり。